

と考えられる。

3 Dual Source CT (Definition Flash :シーメンス社) の使用経験 ; 腹部 dynamic CT について

高野 徹・新田見耕太*・能登 義幸*
八木下裕子*

新潟大学医歯学総合病院放射線科
同 診療支援部放射線部門*

2009年10月より2管球を搭載した Definition flash が稼働し、腹部ダイナミック CT を当初 120kVp で撮影を始めたが、動脈優位相のコントラストが悪かった。このため、造影剤量を 600mgI/kg BW に増量し、管電圧を 100kVp に変更したところ、以前の東芝の機種とほぼ同程度となった。管電圧を下げることでノイズが目立つ画像となったが、逐次近似法を用いた画後処理ソフトにより、ノイズの軽減が可能となった。しかしこの画像処理により微小な横造の評価が困難な場合があり、今後の課題である。

4 マルチモダリティーの中の PET-CT 診断

尾崎 利郎・関 裕史・古泉 直也
大井 博之・霜越 敏和、佐藤 辰彦
県立がんセンター放射線診断科

PET-CT は、機能画像と形態画像を合わせた複合検査である。PET 単独の時代よりは向上したが、1回の検査ですべてが判断できるほど精度の高い検査ではない。今回提示するのは、1) 非常に強い FDG 集積を示したが、過去の CT との比較で縮小を認めたので炎症性と判断できた症例、2) MRI で再発を確認されている病巣には FDG がほとんど集積せず、FDG の高集積により新たな病巣を指摘できた症例、3) 造影 CT で指摘された病巣に FDG が集積しないので、胃がん(低分化腺癌)の再発と推測できた症例、である。い

ずれも PET-CT だけでは誤診もしくは見落としをした可能性があり、総合画像診断の重要性を実感させるものであった。

5 気管支肺分画症の胎児 MRI の 1 例

麻谷 美奈・佐藤 章子・山崎 元彦
吉村 宣彦・青山 英史

新潟大学医歯学総合病院放射線科

限局性胎児先天性肺疾患のうち、気管支肺分画症は比較的頻度が低い。今回、我々は肺葉内肺分画症の 1 例を経験したので報告する。症例は 30 歳代、女性。妊娠 25 週の妊婦健診の超音波で胎児左肺に高エコー域を指摘され紹介受診した。以後、妊娠経過と共に病変部は徐々に不明瞭化した。妊娠 32 週の MRI の T2 強調像で胎児左肺に肺底に広く接して扇状の高信号域を認め、肺門からの気管支肺血管の分布はみられず胸部下行大動脈からの異常血管が分岐、左下肺静脈への還流がみられ、肺分画症が疑われた。出生後の CT 所見も同様で、病変部には含気がみられ、囊胞部分はみられず肺葉内肺分画症と診断した。胎児期に発見される肺分画症は肺葉外肺分画症が多く肺葉内肺分画症は稀であるが、本症例は報告例に合致する所見を呈していた。

II. 特別講演

1 ADC によらない胸腹部拡散強調画像

浜松医科大学医学部附属病院 放射線部
病院教授

竹原 康雄

2 脳科学と外科の融合による神経機能の画像化

旭川医科大学 脳神経外科学講座
教授

鎌田 恭輔